

Title	インタビュー⑤：浅草芸者 平成22年7月(当時88歳)
Sub Title	
Author	宇沢, 美子(Uzawa, Yoshiko) 浅原, 須美(Asahara, Sumi) 坂上, 貴之(Sakagami, Takayuki) 坂本, 光(Sakamoto, Hikaru)
Publisher	
Publication year	
Jtitle	三菱財団人文科学研究助成事業インタビュー No.5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三菱財団人文科学研究助成による研究・インタビュー記録。2010年7月取材
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32001002-00002010-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浅草 芸者 平成 22 年 7 月（当時 88 歳）

大正 12 年東京生まれ。芸人だった母の影響で 3 歳から舞台上で踊る。昭和 10 年 13 歳で浅草の芸者屋に奉公に上がる。仕込みっ子を経て昭和 13 年 16 歳で一本で出る。

○聞き手 ●芸者

<13 歳で置屋に奉公に上がる>

「読み書きそろばんが大嫌いで、踊りが大好きで。兄貴たちは、学校に行ってちゃんとお嫁に行かなきゃだめだよ、と言ったけど、おっ母さんが、芸者は芸さえあれば一流になれるんだから、芸者でいいんだよ、と」

○お姐さんは 13 歳で奉公に上がったんですよね。

●13 で奉公して、16 まで仕込みっ子として姐さん方のお使い歩き。浅草で大勢抱えていた芸者屋さんは、うちの本家（菊の家）と、駒春日といううちだけだったんです。

○菊の家さんには何人くらいいたんですか。

●13 人。そこで大勢いる芸者衆に揉まれたから、お座敷に出ても、ひとつも苦労だと思ったことないですよ。商売出る前（芸者で出る前）におうち（芸者屋）で 3 年間も仕込まれているから。13 でしょう。学校を卒業してすぐだもん。16 で出たんです。

○今で言えば中学生くらいですよ。奉公はいろいろ厳しくなかったですか。つらいことはなかったですか？

●ちっとも厳しくなかった。ひとつもつらくなかった。自分の家にいるより大勢人がいて楽しかったですよ。私、一人っ子と同じですもの。すぐ上の兄と 10 年も違うんだもん、まるで大人でしょう、相手にしてくれないもん。兄は奉公していてうちにいませんでしたし。

○そのころは、何百人もいたんですよね。芸者さんが。

●私が来たときに 300 人も半玉さんがいたの。考えられないわね。

○そのころ、芸者になるということはそんなに珍しいことではなかったのでしょうか。

●私の場合は、うちも貧乏だったんだけど、私、読み書きが嫌いなのよ。読み書き・そろばん大嫌い、でも踊りは大好きだったの。兄貴たちはさ、中学・高校と両方行かなくちゃいけないと言うのよ。「お袋、駄目だよ、甘やかして踊りばかり踊らしていちゃ。ちゃんとお嫁に行くように、きちっと、そういう（学校に行かせる）支度をしたほうがいい」って。母も芸人だから、喜んで私を踊りの会に出してくれるのよ。本当に踊りが好きでした。楽しかったわよ。だけどね、踊りはうんとお金かかるもんね。

芸者衆、今でも大変よ、とくに踊り子さんは。地方（じかた。三味線や唄などの演奏を担当する芸者）だって大変だもん。舞台上で清元を唄おうと思ったら大変。お座敷で唄えばお客様に褒めていただくけれど、たまには舞台上に乗って自分の唄いたいものを唄いたいと

いう思いもありますよ。小唄だとそんなにかからないですけど、段物をやると、自分がタテ（三味線）座ると、脇に少なくとも2丁3枚（三味線弾き2人と唄うたい3人）とか、3丁4枚とか必要になる。なぜ唄うたいを「枚」というかというのと、（曲名のかかれた紙を）めくるから。三味線弾きが「丁」なのは、三味線を1丁2丁と数えるから。だからお金がかかるんだけど、気持ちがいいですよ。舞台上唄うと。踊りなんかなおさらでしょう。

○お姐さんは踊りが好きで芸者さんになりたいと。

●そうそう。そういうわけで（趣味で踊るにはお金がかかるけど）、芸者さんになれば毎日お座敷で踊れるからと、おっ母さんが言って。そしたら兄貴たちが、いろいろなことを言っただけね。「芸者？この顔で？」とかさ。私、チビで、色が黒くて、目がギョロギョロしていたの。「この子が芸者になるの？お袋」って。そしたらおっ母さん、こう言ったわよ。「女優さんは顔が良くなきゃなれないけど、芸者さんは芸さえありゃ、一流になれるんだから、いいんだよ」って。そしたら兄貴たちも「そういうものなの？」なんてね、納得したわよ。

○お兄さんとしては、かわいい妹が芸者になるというのは心配だったでしょうね。できれば普通にお嫁さんにいってほしいと思っていた。

●そう、皆ね。心配してくれて。ちゃんとお嫁さんになったほうがいいよって。

<芸歴75年。芸者としてやり残したことは？>

「本当のこと言うと、お酌（半玉）で出たかった。それだけだ」

○菊の家さんには何人くらいいたのですか。

●私を入れて13人。

○東京だけでなくて地方のほうから来ている人もいましたか。

●福島、青森、北海道……。住み替えと言うのね。よその土地で芸者さんをしてた人が来ていた。住み替えと言うの。

○初めてそこで仕込むんじゃない。

●そう、よそで芸者さんやってた人が来るのは住み替え。そこで初めて仕込まれたのは私ともう1人だったけど、その人は辞めちゃった。芸者さんに出ないうちに辞めちゃった。東京の人よ。私も東京だけど、芸者さんはね、ほとんど田舎の人で住み替えしてくる人が多いのよね。住み替えというのは、その土地で借金して入っているでしょう、また親が借りに来るとだるま式に借金が増えちゃうじゃない。売れてる人だったらいいんだけど、その土地でどうしても売れなくなる人がいるじゃない。そうすると、住み替えというのをやるの（*その土地では借金が返せる見込みがないから、別の土地で借金を肩代わりしてくれる芸者屋に移り、新たな土地で芸者として出る。戦前はその仲介をする紹介人という商売があった）。最後には東京に出て来たいという人は東京へ出て来るわけですよ。それで出世した人もいますよ。住み替えをして良くなる人もいるの。本人の心掛けじゃない？本人

がさ、しっかりした子ならさ、一生懸命、働いて、借金を無くすようにして、いい旦那様をちゃんとつかまえて、立派に待合屋さんやった人いますよ。

○お姐さんは 100 歳までは頑張るっておっしゃっていて。芸者としてやり残したことはないですか。

●……やり残したと言えね、半玉さんで出たかったの。それだけ。だって、そのために一生懸命お稽古を、踊りを、さんざん習ったのにね。出たときにさ、いきなり一本さんだもん。ちょっとやさっとじゃ、お酌（半玉のことを、お酌ともいう）の支度はできない、お金がかかるからね。一本さんならば、持っている芸者衆の着物で出られるのよ。それでもお披露目のときはちゃんと五月の柄でね、菖蒲で、アヤメと言うのかな、ちゃんとしらえてくれましたよ。それも皆、借金だからね。半玉というのはお袖がね、とにかく下にぶら下がっているでしょう。とても傷むんですってね。傷むからね、どうしても 1 枚って言うわけにはいかないの。一本さんというのはね、着物 1 枚でも通せる。

○そんなに傷まないから。

●袖つかないから。着物（裾）は引いていましたけどね。とにかくね、半玉というのはうんとかかる。簪、襟。うんとお金がかかるの。「だからね、悪いけど、これ以上あなたに借金させられないから」って（半玉では出させてもらえなかった）。向こう（芸者屋のほう）だって返してもらえなかったら困っちゃうじゃない？ だから同じ歳の娘さんが半玉で出たときに、うらやましかったわよ。私は、その半玉さんのお荷物を持って。半玉さんたちが持つ、お扇子の入るこういうおかばんを抱えて、その子の後ろからこうやって歩いてついていくわけだ。たとえば、「○○ちゃん（半玉さんのこと）、来てもらえるかな？ ちょっと踊ってもらえばいいんだけど、踊ってくれたら（元のお座敷に）帰してあげるから、頼んでみてくれないかな」なんて、見番から電話がかかってくる。それで（私は連絡係で）急いで（半玉さんの出ている料亭さんに）飛んで行ってね。「踊ったら、また帰してくれるって言っています」と言うと、お客様がさ、「また帰してくれるならいいぞ」って言ってよとかね。そういうのを、中もらい（お座敷の途中で中座して、よその座敷に顔を出して、また元のお座敷に戻る）というんだけどね。私はその間、ずっと一緒についているわけ。

○来年の米寿の会で半玉さんの格好をするのはどうですか？

●仮装は嫌いな。本物ならやるけど仮装は嫌なの。

（一部抜粋。語尾等一部改変）